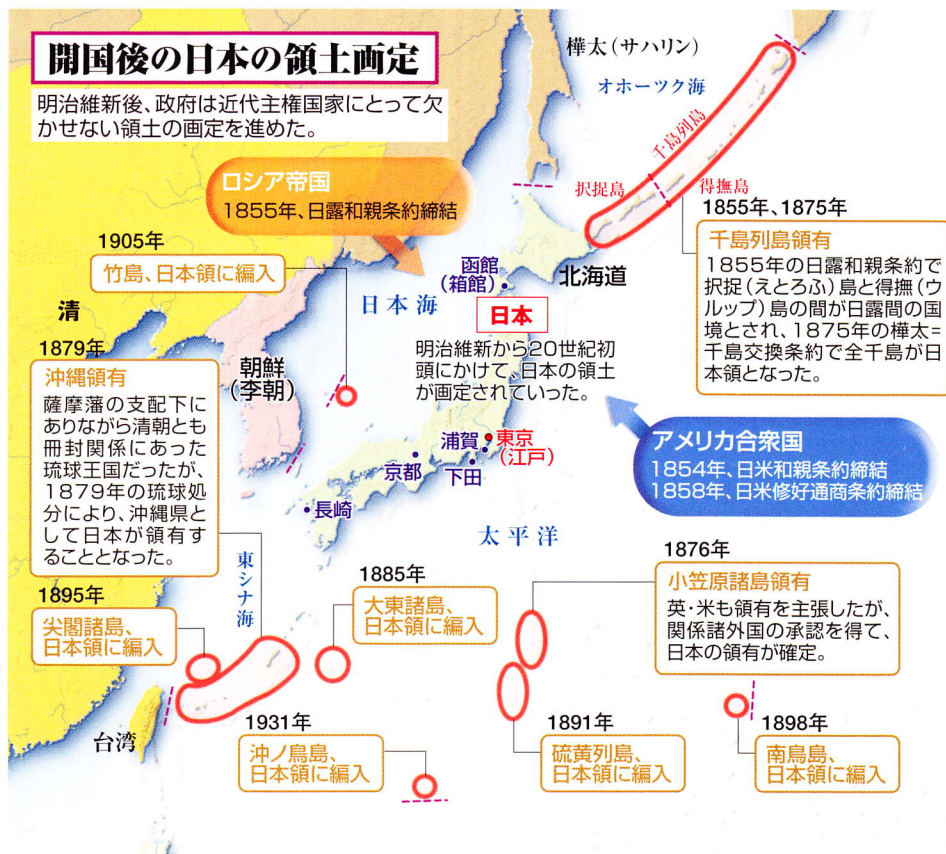


# 明治維新と 国境・領土の画定



アヘン戦争後に強まった列強の東アジア進出により、日本では幕藩体制が崩壊。明治政府の下で主権国家としての道を歩むこととなった。

## 明治維新前後の日本とその周辺



### 開国によって幕藩体制が崩れ 主権国家「日本」が誕生

東アジアに進出した欧米列強の圧力は、日本にも及んだ。この状況に江戸幕府は、異国船打払令などで鎖国体制の維持に努めたが、1840年のアヘン戦争(112参照)で、文明の先進国と仰いできた中国(清)がヨーロッパの武力に敗れたことは、幕府に大きな衝撃を与えた。

53年、アメリカ合衆国のペリーが4隻の黒船(軍艦)で浦賀に來航し、幕府に対し開国を迫った。日本国内ではこれを機に攘夷論と開国論が対立するが、幕府は翌54年に日米和親条約を締結し、鎖国体制に終止符を打った。さらに、58年には日米修好通商条約を結び、同様の不平等条約をオランダ、ロシア、イギリス、フランスと次々に結んだ。これ以後、幕藩体制は急速に揺らぎ、ついに大政奉還によって江戸幕府は崩壊し、68年に明治維新を迎えた。

新たに誕生した明治政府は、欧米の先進文化を積極的に取り入れて富国強兵政策を進めるとともに、89年にはドイツ憲法を手本とした大日本帝国憲法を發布。翌年には二院制による帝国議會を開設するなど、統治体制の整備を図った。こうして日本は、近代的な主権国家として自立してゆくこととなる。

明治政府はまた、主権国家として必要な国境・領土の画定作業を進めた。75年の樺太=千島交換条約で、樺太を放棄する代わりに全千島を日本領としたほか、それまで日本(薩摩藩)と清の両方に服属していた琉球王国を、79年に沖縄県として編入した(琉球処分)。このほかにも、小笠原諸島や硫黄列島、尖閣諸島や竹島などが日本領となり、明治政府のもとで日本の国境・領土が初めて明確にされた。

### アメリカの 太平洋進出と黒船來航

19世紀半ばに領土を太平洋岸まで拡大したアメリカ合衆国は、その後はフロンティア拡大の延長のような形で、太平洋への進出を本格化させてゆく。ペリーの日本來航はその流れのなかでのできごとであり、日本だけでなく琉球王国に対しても、寄港船への薪水の供給などを定めた琉球修好条約を締結させている。

また、アメリカは1867年に財政難で苦しむロシアからアラスカを購入したほか、ハワイではアメリカ人サトウキビ業者が中心となってハワイ王国のカメハメハ朝を倒し、98年にこれを併合している。



ペリー

Key Word

ペリー

[1794~1858年]

日本に開国を迫ったアメリカの海軍軍人。マサチューセッツ州に生まれ、父や兄もそろって海軍軍人という家庭で育つ。1809年海軍に入隊し、西インド諸島や地中海など世界各地で任務に就く。蒸気船を中心とした海軍力の強化を進め、米海軍の近代化に貢献。52年に東インド艦隊司令長官となり、翌年大統領フィルモアの国書を持って日本に來航した。